

## 自閉症についての“誤信念”

郷右近 歩

“False beliefs” about autism

Ayumu GOUKON

### 要 旨

コミュニケーションについて検討を行うためには、当事者双方、そして、第三者的な立場からの観点等が必要となる。しかしながら、コミュニケーションの障害については、一方の当事者の属性として、他方の当事者側が帰属を行うという図式が大勢を占めている。本稿では自閉症について、特に、発話がみとめられない子どもである場合、客観性が求められる学術研究でも自閉症児本人の側の視点が必ずしも尊重されていないのではないかという点を指摘した。今後の課題として、新たな研究方略を構築する必要性が示唆された。

### I. はじめに

私は自閉症児に“挨拶”をされることが多い。客観的事実として記述すれば、初対面の自閉症児が、筆者に対して自発的な身体接触を試みるものが度々ある。彼／彼女らには共通する傾向がある。まず、発話が乏しい。一方で、言語理解は可能である。(あまりそのような素振りは見せない。)大抵の場合、相手の目を直視はしない。(直視しないように見ている。)そのような子どもたちに、唐突に、ひざに乗られたり、匂いを嗅がれたり、舐められたり、耳たぶに触れられたり、連れ去られたりする。ご両親や学校の先生方など、周りの大人は大抵うろたえる。謝られる場合もある。「うちの子が、自分から家族以外の誰かに近寄っていきながら、初めて見ました」と言われたことがある。

幼児の発達相談の際、出会い頭に、自閉症児のお母さんから、「すみません、うちの子、男性が苦手なんです」とお聞きすることはとても多い。親戚や知人の男性らがかかわろうとすると、逃げ回ったり、泣き叫んだりするらしい。相談員がご両親からお話をお伺いしている際に、一緒に遊んでいると、大抵の方が驚かれる。最も印象深いのは、ある自閉症の女の子と遊んでいた際、ふと私たちの様子に目をやり、「うちの子が色気づいた…」と呟いたお母さんである。(その女の子が私のことを異性として意識していたとは思えないが、お母さんにはそのように見えたらしい。)

遊んでいるだけでよいと言われれば、自閉症の子どもたちとかかわることに困難を感じることは少なくなった。その子の興味関心を尊重し、嫌がりそうなことをしないよう心がけさえすれば、同じ場にいることは可能である。しばらく時間を共有し、「この人は私の嫌がることを無理強いすることはない」と理解してもらってからでも、何かをお願いしたり、何かを伝えたりするのに、遅くはないのではないだろうか。しかしながら、世の中には、積極果敢に教え諭し導くことを使命として、情熱を燃やしている方々も少なくない。因果関係は不明であるものの、自閉症児が私に近づいてくる時、その場には積極果敢に教え諭し導こうとしている誰かも一緒にいることが多い。

上述のことからは、自閉症児は他者の性情を敏感に察知しているように思われる。他者に関する興味関心がないわけでもなく、積極果敢にかかわろうと向かってくる相手が苦手なだけのような印象さえあ

る。これらは根拠の薄弱な私見だが、「自閉症児は、他者への興味関心や、かかわろうとする意欲が乏しい（自閉症児は人を避ける）」「自閉症児は、他者の意図や感情など、心的状態を直感的に察知することはできない（自閉症児は相手の心が分からない）」といった言説にも事実とは言い難い側面がある。本人たちに尋ねて、答えてもらえばはっきりするようにも思われるが、ことは単純ではない。筆者を触りに来るような子どもたちの多くは発話が少なく、全く有意語を口にしない子どももいる。会話の苦手さが顕著である場合、答えてもらえたとしても「信憑性がない」と判断される。近年では、当事者の自伝等で明に暗に示唆されているようにも思われるが、「信憑性がない」という声はなかなか弱まらない。

## II. かかわりに際して心がけること

自閉症児とかかわる際、筆者が心がけていることがいくつかある。①意識してもらいたい時には、はじめから直視はせず、視界の端に入れておく。（相手にとっても同じ状況を保つ。）②性急に向かってゆくことは慎む。③反応をうかがいながら、働きかけはゆっくりと、いつでも止められるように行う。④声がけはできるだけ穏やかに、ゆっくりとした口調で、簡潔に語りかける。⑤興味関心を示してもらえようような、手に取ることのできる品物を複数用意しておく。以上のような心構えで対面の場に臨む。その上で、かかわり手である自分に意識を向けてもらうことができそうか、それが難しく（児の持ち物も含め）品物を媒介として関心を共有してゆくことから始めた方がよさそうか、かかわりの糸口を探る。（初対面の相手と出会うような状況を前もって理解している自閉症児は、大抵、お気に入りの品物を家から持参している。）つまり、一方的に見つめるような状況、一方的に話しかけるような状況、一方的に身体に触れるような状況を意図的に避けている。

一方的に見つめられること、一方的に話しかけられること、一方的に身体に触れられることを多くの人間は好まない。自閉症児の多くも、一方的に見つめられること、一方的に話しかけられること、一方的に身体に触れられることについては、好ましくは感じていないように見受けられる。その場から逃れようとする自閉症児に対して、かかわり手は、手をとったり抱きとめたり（一方的に身体に触れ）、目を直視するよう向き合い（一方的に見つめ）、滔々と（あるいは感情的に）論し始める（一方的に話しかける）ことが多い。言葉を話し、明確に不快感を表すことのできる相手には拒まれるであろうかかわり方を、よりによって、それらが苦手な自閉症児らに対して、“教え諭し導こう！”としている大人たちは「この子のために」と断じて行なってはいないだろうか。

## III. 誤った認識の温床

最近も、「家に引きこもり自閉症的な生活を云々」「最近自閉症気味で人づきあいが云々」「この経験によって当時の私は自閉症となり云々」といった類の言や文章が出版物等においても見受けられる。自閉症という言葉を一時的に生じる過度な内向の状態」という意味として解している上述のような用法は、発達障害の一種である自閉症の概念を歪めることに寄与している。すなわち、「自閉症の人々は他者が嫌い」「自閉症の人々は孤独を好む」等々のイメージを助長している。自分に対しての不快感や、それらを頻繁に示す他者を嫌い、そのような他者との接触を避けるために対人距離を測るということは、人間に普遍的な傾向である。大多数の人間が不快とは感じない他者の言動や刺激に対して、強い不快感を生じる脳の機能状態にあれば、それらを避けようとするには合理性がある。

しかしながら、大多数の人間が不快とは感じないということ根拠として、自閉症の人々の反応を「わけのわからない」「理解のできない」ものとして捉える向きがある。発話による意思表示や表現に困

難を抱えている場合、ますます誤解が募る。「突然、他者から一方的に身体に触れられた」ことで泣き叫んだ自閉症児に対して、きまりの悪くなった大人が「この種の子どもたちは、どんな人にどのように触れられても嫌がるのだ。」「したがって、かかわる皆さんは、この種の子どもたちの身体に触れない方が賢明です。」などと、もっともらしく説明しても、嫌がった自閉症児本人は訂正する術を持たない。言葉を弄することができる者が誤った帰属を行い、それらが通説となってしまうと、一部の人々が小さな声を上げたところで覆すことはできなくなる。きまりが悪くなった大人というのが、社会的な発言力の強い者である場合は尚更である。

一人の人間と、一人の人間とのかかわりにおいて、不適切と思われる言動はとらないと大人の側が心掛けるだけでも、自閉症児との関係は変化しうる。通常、大人同士の関係において、視線をじっと合わせたり、性急に対人距離を詰めたり、相手の意向をうかがわずに働きかけたり、相手の興味関心を無視して自分の意のままに従わせようとしたり、といったことは慎んでいるはずである。ところが、驚くべきことに、自閉症児とかかわる多くの大人が、何としてでも視線を合わせようとしたり、一方的に近付こうとしたり、相手の意向を押し量ろうとしていなかったり、その子が興味関心を示していない活動を無理強いしていることがある。よく見られるのが、迫ってくる大人から逃げようとする自閉症児を追いかけ、手首をつかみ、向かわせたい場所へと引き連れ、本人の意向の確認や、何をしてもらいたいかという具体的な説明や説得をすることなく特定の活動を命じている大人の姿である。通常の間人間関係においては認められるはずもないこのようなかかわりが、まかり通っているのが自閉症児を取り巻く現状ではないだろうか。

#### IV. 今後の課題

たまに、不自然なほど相手の目を見つめたり、過剰なほど相手に近付こうとしたり、一方的に他者の身体に触れたり、相手の意向を押し量ろうとしていなかったり、自分の興味関心のある事柄について一方的に伝えようとする自閉症の人々に出会うことがある。そのような言動をコミュニケーションの障害と評したり、いわゆる問題行動として周りの大人が捉えている場合がある。しかしながら、そのような対人スキルを身につけるに至るまで同様のかかわり方を続けてきたのは、他ならぬ周囲の大人たちではなかったかという点は、指摘されることが少ない。卵が先か、鶏が先か、という話は難しいが、何らかの影響を及ぼしている可能性は否定できない。つまり、相手（自閉症の人々）の側に固有の問題として捉えている事象が、自分の姿を映し出す鏡である可能性について、認識されることが少ないのではないか、というのが本稿における問題提起である。

自分が相手にされたくないことを相手にしてはいけない、というのが他者とのかかわりにおける前提である。ただし、自分が相手にされたくないことであるからこそ、自分ではない他者にしたいという欲求も生じうる。それに対しては、言葉や行動により、直接的もしくは間接的に、明に暗に、拒否や回避を行うという選択肢を多くの人には有している。（その選択肢を実行に移すことができるかどうかは、各々の置かれている状況等によって異なる。）自閉症の人々の中には、言葉（特に発話）による拒否や回避ができない者が少なからず存在している。拒否や回避がうまくできない者や、言葉により意思を表出できない者も、当然の事ながら様々な心情を抱いている。そのことは、泣いたり、避けたり、傷つけたり、様々な行動としてあらわれる。ただし、自閉症児の場合、一見ただけでは分かりにくい、場合によっては誤解されやすい形で自らの意をあらわすことや、そうせざるを得ない状況に置かれていることもあり得る。

少なくとも、コミュニケーションの問題は、かかわりあう双方の観点から把握・分析しなければ正確

な認識には至らないと考えられる。一方の当事者の側の認識・解釈・帰属に基づく分析は不完全であり、双方の視点から、場合によっては、第三、第四の視点を交える必要がある。(国際社会における国家間の関係を思い描けばその必要性は認識しやすいものと思われる。) そのような研究の方法論の構築が、自閉症児のみならず、その他の様々な障害を有する人々についても課題として残されている。

#### 参考文献

- 別府 哲 (2001) 自閉症幼児の他者理解. ナカニシヤ出版.  
栗原輝雄 (2007) 特別支援教育臨床をどうすすめていくか 学校臨床心理学の新たな課題. ナカニシヤ出版.  
Williams, D. (1992) Nobody Nowhere. 河野万里子訳 (2000) 自閉症だった私へ. 新潮社.  
Williams, D. (1994) Somebody Somewhere. 河野万里子訳 (2001) 自閉症だった私へ II. 新潮社.  
Williams, D. (1996) Like Color to the Blind. 河野万里子訳 (2005) 自閉症だった私へ III. 新潮社.